
モンスターハンター<約束の士>

伊村 希人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター<約束の士>

【Nコード】

N9659P

【作者名】

伊村 希人

【あらすじ】

自分の生まれ育った故郷を救うために出稼ぎハンターとなった主人公。

数々の出会いや困難を経験し、成長していく主人公とその仲間達との日々を綴った物語。ある時は真面目に、またある時はまったくモットーに執筆中です（読んでいる途中に目眩や吐き気、かなり重度の退屈、作者の頭沸いてるんじゃないかね？、といった症状を感じられましても当方は一切の責任を負いません）

プロローグ（前書き）

初めて、つまり処女作ですので間違いなどを指摘していただければ幸いです。

プロローグ

活気など感じられない寂れた小さな村に、夕暮れの陽射しが差し込んでいた。

その中の広場のようなところに、二つの影があった。

「...託したよ、村の未来」

座っている影がそう言って、立っている影に一振りの立派な太刀を渡した。渡された方の影はその太刀を抜き、地面に突き立て、その場にひざまずいた。太刀の刀身は夕陽を受けて、まるで燃えるように光を揺らめかせている。

「必ず、必ず約束を果たしてみせます」

すると、二つの影の間を冷たい風が吹き抜けた。風が収まると、ひざまずいていた影は太刀を納めた。

「では村長、お元気で」

「アナタこそ、死なないでね……」

これは、夕暮れの廃村寸前の村での一幕。

太刀を背負った影は村から旅立ち、残った影は祈りを捧げていた。

1 到着した街にて

山間にある街、パラクス。

村と呼ぶには大きく、都会と言うにはイマイチ規模の小さな貴族自治の街だ。

「よあ、アンタはハンターかい？」

大きな石造りの門をくぐったところで、私は門番とおぼしき若い男兵士に呼び止められた。

「そうだけど？」

私が当然と言うように背中の中の太刀に目を遣った。

すると兵士は、何かの紙を懐から取り出した。

「コイツに名前や出自のことを書いて、向こうにある集会所に出してきな。そうすりゃ街付きのハンターになれるぜ」

「どうも」

紙を受け取り、石畳で舗装された道を歩き、早速集会所に入ると、やはりというべきだろうが、酒や食べ物臭いで満ちていた。

おまけに、ものすごい数のハンター達の騒ぐ声で無秩序な空間が創り出されている。

それを尻目にもっと静かに酒が呑めないものかと思いつながら、奥のカウンターに何とかたどり着く。

と同時に、変に絡まれなくて良かったと安堵する。

「あら、新人さん？」

受付の女の子が見慣れない顔だと判断したようだ。流石、こんなところで平然と働いているだけあって、有能なのだろう。

しかも美人さん。

「ええ、門番からこれを貰いました」

先程の書類を取り出すと、彼女は傍にあったペンを持った。

「じゃあ簡単に聞くわ。あなたのその太刀の名前は？」

「え、鈴鳴」ですが……」

そう私が答えると、彼女は何やら書類を漁り始めた。

もしかしてギルドナイトに目を付けられていたとか？と言っても全く心あたりはないのだが。

そんなことを考えていると、彼女は一枚の書類と鍵をカウンターの上に出した。

「これは……？」

「こちら、アクルル様の証明書とお部屋の鍵です」
なるほど、紹介はされてたのね。

喧騒のど真ん中を突っ切って集会所を出ると、案内を受けた場所

寄宿舎へと向かった。

街行く人々はみな一様に明るく、とはいかなかった。

街の真ん中に走る一本の大きな道から一本外れると、そこはもう治安の行き届いていない危険地帯のようだ。

浮浪者達の姿が視認できる。

表と裏がある街……まるで人間の内面の具現のようだ。 村や、

そこに住んでいた人と違い、何とも気持ちの悪い。

早いところ金を稼いで出て行きたいところだ。

「……ここかあ」

二階建てで横長の建物に行き着いた。

傍の立て札にも『ハンター寄宿舎』と簡単に書かれている。

恐らく間違いはないだろう。

「えっと……207ってことは2階の一番奥か」

部屋の錠を外し、中に入ると案の定、埃の臭いが出迎えてくれた。

さらに、長い間使われていなかったのだろうか、ところどころにクモの巣が張り巡らされていた。

とてもじゃないが、今の状態では到底住めそうもない。

「こりゃ、掃除で一日が終わりそうだね……」

集会所から掃除道具一式を借りて、掃除をしていたら結局日が暮れてしまった。

クエストに行ったことと思えば疲れてはいないが、それでもなかなか疲れた。

このまま寝てしまいたいが、風呂にも入っていないし、何より腹の虫が収まってはくれないだろう。

もう体に乗っ取られるのではないかと思うほどだ。

という訳で、あまり気は進まないのだが、集会所の酒場で腹を満たすことにした。

先に、部屋のシャワーで体を洗ってから簡単な格好に着替えて部屋を出ると、目の前にはこれまたかなり可愛い女の子が風呂敷と呼ばれる包みに何かを包んで立っていた。

「え、あの……」

突然すぎてしどろもどろになる私。

女の子は驚いた顔をした後に赤面し、風呂敷を私の胸に押し付けて無言で走って行ってしまった。

今の娘は一体……？

そう思いつつ一度部屋に入り、風呂敷の中を確認する。一応危険物ではないかと警戒しながら風呂敷を解くと、木箱があり、その中にはおにぎりと肉が入っていた。

特に肉からはものすごく食欲をそそられる香ばしい匂いが……。

「……………じゅるる」

腹の虫が、轟竜の咆哮の如く鳴り響き、口からは疲労したモンスターの如くヨダレが……。

「これで毒だったとしても私は全く後悔しない」

かなり失礼なことを言いながら肉にかぶりつく。

肉汁が溢れ出し、口の廻りがベトベトだが気にしない。そして

……………！

「うまつ！」

叫んだ。

謎の美少女に感謝しながら腹を満たし、綺麗に片付けをした。そして弁当箱包みを見ながら思った。

「これ……どうしよう？」

後のことを考えていなかった。

少女がどこに行ったのか、まずどこの誰かも分からない。

どうしたものか……。

しばらく思案した結果。

「とりあえず、寝る」

文句は明日の私に言って。

こうして一日は終わった。

2 酒場にて

「ふー……よく寝た」

街での二日目の第一声だ。

村と違って寝坊しても誰も起こしには来てくれない。本当に一人だという事を実感しながら起き上がる。

そして、見つめる視線の先には昨日の風呂敷。

これを先ずはどうかする必要があるだろう。

どこの誰がくれたのか分からない。

分かっているのはか弱そうな女の子ということだけ。

……探し出すのは無理では？と思った矢先に、部屋の扉がノックされる。

そして

「誰かいますかー？」

はきはきとした声が室内に響いた。

「え、と……どちら様ですか？」

至極普通のことを聞いただけなのに目の前の淡い朱色の長髪をサイドポニーにした釣り目の美少女。昨日の子とは見た目も性格も方面が全く違う。は眉をひそめた。

「それが人に飯を食わせてもらった人の態度？」

「は？」

私はついついほうけてしまうが、美少女は私の後ろにある普通敷を指差した。

「それ、アタシのだから」

「ということ……」

「アタシが新しい住人である、新人ピンボーハンターであるあなたの為にご飯を作ってあげたの。お分かり？」

自分の無い胸を指差して言い張った美少女。

「でも、なんでそんなことを？」

これまた素朴な疑問だったのだが、また美少女の機嫌を損ねたようだ。

「あのね、アタシはこの寄宿舎の管理人よ？入居二日目で追い出されたい？」

それだけは是非とも勘弁して頂きたい。

しかし未だに昨晚の飯と、目の前の美少女が管理人であるという繋がりが見えないのは気のせいじゃないはず。

「すまないんだけど、どういふことか教えてもらえないかな？」

ここは聞くのが一番だと思い、美少女に聞くもそっぽを向かれた。

「まあいいわ。とりあえず、それだけ早く返しなさい」

教えてくれないのね。とは言えず、大人しく風呂敷を返す。

「あとついでだから、家賃について言っとくわ。家賃は月に500Zよ。アタシのところに直接納めに来てくれて構わないわ。という訳で、今月の分を寄越しなさい。逆らってもいいけど、その時は……分かってるわね？」

じゃ、と言って美少女はさっさと行ってしまった。

元から寂しい懷から500Zを私からふんだくって……。残されたのは中身が寂しくなった私の財布だけだった。

酒場にて朝飯を摂る。

と言っても手持ちもあまり無いため、必然的に軽食になってしまふ。

「……腹が満たされん」

これが食後の一言だ。

安いメニューでも味は申し分ないのだが、如何せん量が少ない。普段の大体半分にも満たない程度だ。

とりあえず飲み放題の水を飲んで無理矢理腹を満たそうとしたとき、旨そうな料理が盛られた皿が一つ、目の前に置かれた。

「こ、これは……？」

皿を置いてくれた給仕の女の子に問い掛けると、視線を向こうのテーブルに向けた。

その視線を追うと、気さくに笑いかける気障ったらしい男がいた。

「余りにも切羽詰まった表情をしていたのでね」

と言つて差し出された先程の料理に私は遠慮なくがつつく。

男も何も言わずにこちらを見ているだけだった。

多分、呆れた表情をしていたに違いない。

「んで、本当の理由は？」

そう問うと、男は驚いたという表情を作り、そして真剣な顔になった。

「……その太刀は、どういった業物なんだ？と思つてね」

成るほど、この男は目利きのようだ。

確かに今背負っている太刀は工房にあるレシピでは造れない太刀だとは聞いている。

けど、由緒正しいとかそういったお話は嫌いなので聞いていない。そういったことを話すと、男は笑った。

「そうかそうか。見たことない太刀だからつい興味が出ちゃって」

そりゃ、世界で一振りしかない太刀だ。

収集家なら喉から手が6本は出るほど欲しがらるだろう。

が、こいつだけは何かあっても譲れない。

「悪いけど、渡せないわ」

「いや、いい。見ただけで満足だ」

意外にあっさりと引き下がる男。

エサで釣ったくせにー。

ま、いつか。

「んで、ご飯代金は？」

すると男は苦笑した。

「まさか請求するとも？」

「さーてね」

「太刀を見せてもらったからそれで十分だよ」

あら、思ったよりいい人なのかも。

それじゃあ有り難く奢られて、ここは退散しますか。

「んじゃ、あんがとねー」

「いや」

そうは行かなかった。

あるえー？

「その太刀の性能も見たいから、一緒にクエストに行ってくれないか？」

ちなみにもう料理に代金は支払われた後だった。

こ、断れん……。

3 密林にて

「それじゃ、どの依頼にしようか」

あまり難易度の高い依頼は無理だが、簡単過ぎる依頼では稼ぎが安い。

そこらへんの加減が面倒なところだ。

「特産キノコ10本……は簡単過ぎね……」

報酬は900Z。

集会所にある依頼のため、少し報酬も難易度も上がるが、街の依頼とさして変わらない。

なるべく自分の実力と報酬が釣り合う依頼を探していると、男
キュラという　　が一枚の依頼書を持ってきた。

「ジャギイ8頭の討伐だ。まあ油断しなければ余裕だと思うよ。狩場も近くの密林だし」

「んじゃ、それにしようか」

報酬は1200Z。

採集系のクエストなんかよりもよっぽど早く稼げる。

但し、危険度は上がるというのが難点だ。

でもまあ、余裕でしょ。

こうして私の出稼ぎに来て初めてのクエストが始まった。

狩場は思っていたよりずっと観光に向いた場所だった。

ベースキャンプの周りの木々には鮮やかな色の実が成っており、緑だけの鬱蒼とした空間ではないので、見ていて飽きない。

お昼ご飯を食べてお昼寝したくなるような所だ。

しかし、そこにはびこるモンスターがいなければの話だが。キュラはハンターシリーズ装備で、武器はハンマーだった。

よくあんなもん振り回せるなあ、と思うのは筋トレを嫌がった私ぐらいか。

女性であつてもハンマーを遣うハンターはたくさんいる。

「さてと。日帰り出来るといいね」

キュラは呑気そうにストレッチをしながら言った。願わくばそうであつて欲しい。

時間帯は昼を少し回った頃か。

この程度の依頼ならと言っても、初めての狩場の為に土地勘がない。

なので必然的に土地勘のあるキュラについて行くことになる。

地図？何それ美味しいの？

「……いた」

キャンプから少し進んだエリアに目標はいた。

2匹だが、まだ奥や死角にいるかもしれないと注意を払いながら距離を詰め、手近な茂みに身を隠す。

「僕が奥のを片付けるから、アクラルは手前のを頼む」

私が頷いたのを見て、キュラは茂みから飛び出し、一直線に奥のジャギイへと突っ込む。

一瞬タイミングを置いて私も手前のジャギイに切り掛かる。

「鈴鳴、抜刀！」

軽やかな金属音が鳴り、ジャギイの首を容易く切り裂いた。

初めて遣う太刀の切れ味に、驚きを隠せない。

これ程簡単にジャギイを仕留められるなんて体験したことのないことだ。

それだけでなく、太刀が勝手にジャギイに喰らいついたような感覚も手に残っている。

これが村の秘刀……。

「どうした？」

キュラの声で我に帰ると、少しの間ぼーっとしていたのに気付いた。

何でもないと返し、先を急ぐ。

が、土地勘のない私で先導は務まらないのでキュラが先を歩くことになったが、彼はその後何も言わなかった。

次に開けたエリアに足を踏み入れると、草原らしく草食獣のアップトノス達が草をはんでいた。

彼らはこちらから手を出さない限り襲ってはこない。

「あと、1匹なんだけどなあ」

キュラが苦笑しながら草原を歩く。

このエリアには奴らはいなさそうだ。

時間帯的には夕方と言っても差し支えないぐらい日が傾いている。ジャギイ8匹を狩るのにこれほど歩き回るとはキュラも思っていなかったのだろう。

それが彼の先程の苦笑の原因だった。

「野営に備えて肉を狩っておくかい？」

「いいわ」

太刀を抜刀する度に感じる奇妙な感覚にまだ慣れていない私は疲れたように言った。

大体、そんなことをしている時間など私にはない。

村では私の稼ぎを期待して待つてくれている子がいるのだから。

あと、個人的に草原獣を狩るのはあまり好きじゃないと言つのもある。

あんなに可愛いのに肉の為に狩るなんて、人間失格よ。

「じゃあ先に進むとしようか」

草原獣の群れに、慈愛の視線を送ってからキュラの先導のもとに付いて行こうとした時だった。

草原中に響いた声。

飛竜のそれに比べれば可愛いものだが、新米のハンター達にとっ
ては十分な恐怖。

立派なトサカがトレードマークのドスジャギィだった。

4 奇襲にて

4

ドスジャギイの吠える声はしたが、こちらに気付いた訳ではなさそう、アプトノスを威嚇している。

「どうする、逃げるかい？」

冷静に考えれば、ドスジャギイの側にいるジャギイを狩ればそれで依頼は達成だ。

だが、装備も満足でない私達では危険度が高い。

よって、時間をかけてでも迂回して別のジャギイを狩るのが安全だが、何せ私には時間がない。

少しぐらいの無茶も承知で出稼ぎに来たのだ。

村長 あの子の為に。

「ううん。ここできめる」

作戦は決まった。

始めと何ら変わりはない。

キュラが奥のジャギイとドスジャギイの気を引いて、一手に引き受ける。

その間に私が一匹のジャギイを仕留め、討伐の証拠になる鱗を2、3枚剥ぎ取って撤収。

最後にキュラとでキャンプで落ち合うというもの。

この作戦の成否は、いかに私が素早く行動するかにかかっている。「ホントにいいの？」

キュラに最終確認をする。

本来なら、こんな無茶には付き合ってもらおう義理もないのに、彼

は進んで囷役になってくれた。

人に迷惑をかけるのは流石に気が引けるし、それでもし万が一死なれたら目覚めが悪い。

「ああ。クエストに誘ったのは僕だしね」

ハンマーを研ぎながらキュラは笑った。

あ、別にときめいたとかはないのでご安心を。

「んじゃあ、お願いするね」

「任せてくれ」

それぞれ携帯食料で腹をある程度満たし、得物を点検し終え、私はドスジャギイ率いる一団の真後ろの背が高い草に息を潜める。

もう太陽の光も少なくなっており、完全な日没までに何としてもキャンプに戻りたい。

そうでないと、目が暗闇に慣れず、戦いどころではなくなってしまうからだ。

だからと言って無闇に襲い掛かっても返り討ちにされて終わる。なので隙が出るのを待つことが常套手段だ。

今、彼らは一頭のアプノトスを襲っており、もうすぐ食事の時間となるのだろう。

弱々しいながらも抵抗するアプノトスを助けに行きたくなくなるが、ぐっと我慢して時を待つ。

やがてアプノトスの抵抗も止み、ボスであるドスジャギイが咀嚼を始めた。

だが、3匹のジャギイが辺りを警戒していてまだ手が出せない。

彼らのいずれかが咀嚼に加われれば、即座にキュラが真正面から突撃する。

そして背後から私が一匹のジャギイを狩る。

作戦を心の中で反芻し、深呼吸した時だった。

「おおりやああ！」

大袈裟な程大きな気合いの声を上げて飛び出したキュラに続き、正反対の位置にいた私も草から飛び出す。

その際に躓きかけたのは「愛嬌と言うことで。

ドスジャギイの反応は早かった。

咀嚼中であつたことを物語る真つ赤な口を開けて吠えた。

「せいやあつ」

気合いと共にハンマーをドスジャギイに振り下ろし、先手を取る。しかし、それは一匹のジャギイが盾となり、ボスを守つた。

これでいい。

後ろに飛んだジャギイの死体を剥ぎ取るアクリルを視認できた。

後は、僕が時間を稼いで逃げるだけだ。

そう思い、気を取り直してハンマーを持ち上げた時には、ドスジャギイは手下の二匹を従えて距離をこちらに詰めていた。

何とか反撃をかわしてキャンプとは反対方向に走る。

「しまつ」

日が落ちて、しばらく走って奴らとさらに距離をとろうとするが、暗闇に紛れていた小さな穴に足を取られて転倒してしまふ。

何とか態勢を立て直そうとしたが、足首を痛めたのか、満足に回避行動ができずに転がってしまふ。

慌ててジャギイ達の方に顔を向けるが、そこに映つたのはいつもの弱小の肉食竜ではなかつた。

血に飢え、目をぎらつかせて自分の命を狙う恐怖だった。

赤に染まつた口が開かれたまま自分に迫る。

ハンマーを盾にしてジャギイの口を拒むが、もう一匹のジャギイが加勢し、ハンマーを奪われる。

そして一際大きな恐怖が、食事の邪魔をした報いだと言わんばかりに威嚇する。

叫ぶことも出来ず、目を閉じて観念したときだった。

この場には不似合いな軽やかな金属音が、鳴つた。

5 逃亡にて

途端、片方のジャギイは絶命した。

「え……あ……」

異変に気付いたドスジャギイは辺りを見回す。

と同時に、もう片方のジャギイも絶命した。

「逃げるよ」

狼狽する僕にかけられた声は、ひどく懐かしいものに感じられた。アキラルの声だった。

時は少し遡る。

キャンプに着いて、帰り支度を終えたところで一休み。ベッドで横になってキュラの帰還を待つことにした。

“鈴鳴”を傍らに置いて固いベッドに身を横たえたところで目を閉じる。

すると、何故か瞼の向こうが明るい。

薄目を開けると、“鈴鳴”が光っているではないか。

『……くそっ、まだ追ってくるってのっかっ!?!?』

「っ!?!?」

突如響くキュラの声。

空耳でもなんでもなく、確かに聞こえた。

いや、耳で聞いたと言うよりは頭に直接響いたとも言っのか。

何とも不思議だ。

それよりも、キュラが危機に陥っている。

ふと、昔に師と仰いだハンターに言われた言葉を口ずさむ。

『いいか？焦りは死に直結する。だから自分の頭をクリアにして狩りに集中するんだ……』

ところがキュラはこの言葉に反して、予想外の出来事で焦っているのが簡単に分かった。

このままではキャンプには無事に辿り着けないかもしれない。

今日会ったばかりとは言え、同じハンターとして見捨てられない。

「……よし」

そう思った私は、鈴鳴を背負い、私はキャンプを飛び出した。

そして今。

「ほら走りなさい！」

明らかにスピードの出していないキュラを叱咤するも、キュラは荒い息を繰り返すばかりで返事もしない。

そればかりか、走り方もどこか不自然だ。

「僕が困になるから逃げろ！」

振り絞ったように放たれた声を、私は拒否した。

「いいから走る！」

彼は何か言いたそうだったが、無言で走る。

きっと男としてのプライド云々だろうけど、今はそんなものを尊重する必要は認められない。

やはり、ドスジャギイの走る速さの方が遙かに速く、もうすぐそこまで距離は縮まっている。

「ぐあっ！」

私の後ろで苦悶の音が響いた。

振り返れば、キュラが転倒している。

そしてその眼前には目をぎらつかせているドスジャギイ。

今にも大口を開けて獲物に食らいつこうとした時、なにか柔らかいものが飛び散る音がしたかと思えばドスジャギイは一目散に逃げて行った。

「た、助かった……」

ホツと息を吐いたとき、鼻に異臭を覚えた。

「即席こやし玉って言ったところだね」

あのあと、私に肩を貸してもらいながらも無事にキャンプに到着したキュラの第一声だった。

予定より大幅に遅く帰って来たので、日帰りは不可能ということ
で本日は夜営。

まだ、そこまでなら許せた、が。

「あんなところに草食獣達のトイレがあつたなんて、ホントにツイてるわね」

地面に座って携帯食料をかじる私は少し不機嫌。

まさか年頃の乙女が、見た目愛らしいとは言え、モンスターのトイレのど真ん中に立つとは。

「それにしてもまだ臭うわ……」

「おいおい、そのど真ん中ですっこけた僕はどうすりゃいいんだよ」

その一言に、ムツとなる私。

「とりあえず足首治せ」

「ぐうの音も出ないな……」

苦笑いするキュラだが、足はひねっただけの軽傷。

とりあえず応急処置で薬草を塗って足を固定している。

「……すまなかつたな、ドジって」

酒場の時のように気障つたらしい雰囲気になったところを見ると、大分痛みも落ち着いてきたみたいだ。

「礼なら、この刀に言ってくれろ？」

「それはどうということだい？」

私が先にキャンプに戻ってからのことを話すと、彼は何やら思索顔になる。

「不思議な話だ。だけど……心当たりがある」

彼は居住まいを正し、私を見つめる。

顔は悪くないので不快感はないが、気持ちが落ち着かない。

そんな風にまじまじと見つめられたことがないからだ。

「アキラル、君はこの出身？」

「え……アイラ、だけど」

すると、彼はすっと目を細めた。

「……幻鏡竜と言うモンスターを聞いたことあるかい？」

幻鏡竜。何だろう、ものすごく懐かしい響きのする単語だ。

「多分、あると思うんだけど……」

私がそう答えると、彼はそうか、と言って腰掛けているベッドに横たわる。

そこからはお互いに言葉を発せず、何となく気まずい夜を過ごした。

6 帰宅にて

朝の日差しを受けて穏やかな朝を迎えた。

私は固い地面から痛む体を無理矢理起こし、近くの切り立った崖のようなところに立った。

すると、眼前には壮大な自然が広がっていた。

狩場で夜を明かすことはあるが、初めての狩場の朝の姿はどこか神秘的だ。

「あれって……」

崖の上にあるキャンプから、緑の木々の間で動くモノを視認した。ドスジャギイだ。

こちらには気付いていない、いや、気付く筈もないのだが、こちらの方を見ている時はヒヤヒヤする。

「もう起きてたのか」

後ろから声をかけられた。

言わずもがな、キュラだった。

「早く帰ってお風呂入りたいし、何より美味しいご飯が食べたいしね」

食欲を優先してしまうのが悲しいのだが、実際に携帯食料なんて食べたものじゃない。

が、少ない量で腹を膨らませられる上に栄養価が高い。

まさに理想の食品と言っても良い 味を除けば。

「じゃあ、早いとこ準備して帰ろう」

最低限の身支度を終え、徒歩で街へと戻った。

お昼丁度、街には到着した。

「じゃ、僕はこっちなんで、夕方にまた集会所で会おう」

と言って『ハンター寄宿舎』と書かれた立て看板の方を指す。

「いや、私もそこだよ？」

何気なく言ったつもりだったが、キュラは狼狽した。

何かまずかったかな。

「……最悪」

キュラがそう呟いたとき、彼は頭を軽く押さえた。

キュラの視線を追えば、先日私からなけなしの500Zを奪って
いった少女がいた。

しかもこちらを睨んでいるという嬉しくないオプション付き。

「キュラ、何してるの？」

何気に目が笑ってない少女の問いに、キュラはしどろもどろする。
まるで悪戯を見つけられた少年のようだと私は思った。

「あ、いや、これは……」

キュラの言葉を無視して何かに視線を送る少女。

それはキュラの右足首に注がれている。

「一日いなかったと思ったら、怪我して帰ってきたの？」

少女の声には険が入っているのは気のせいじゃないはず。

いくら鈍い私でも分かるんだから相当なものだ。

「……す、すまん」

素直に謝ったキュラだが、少女は表情を少しも和らげない。

むしろ目つきがさつきよりもきつくなっている。

その様子にますます参っていくキュラ。

「まあ、いいわ。部屋に戻ったら早いとこ寝なさい」

何かまだ言いたげな表情だったが、引き下がっていった。

「助かった……」

「あの子とどういう関係？」

私の問いに疲れたように呟いた。

「妹だよ」

……妹のケツに敷かれるってどうなのだろう。

夕方、約束通りに集会所へと向かうと、いつも通りの喧騒が広がっていた。

暴れたりするハンター達の横を通ってキュラを探すと、角の三人掛けのテーブルにいた。

「ごめん、遅くなった」

私の姿を認め、キュラは気さくに手を振ってたりする。

「僕も来たところだ。ささ、座ってくれ」

勧められた席に座ると、さっそくキュラは麻の袋を二つ取り出した。

「これが君の報酬金と素材だ」

素材の入った袋には紫色の鱗や牙といった素材が詰まっていた。

次に報酬金は、山分け分の600zのはずが、1000z入っていた。

「あれ、報酬金多くない？」

「気のせいだろ」

キュラはポコポコーラを飲む手を止めずに言った。

何事もなかったかのように言うが、私は納得がいかなかった。

「これは立派な違反行為よ？」

「気のせいだ」

あくまでシラを切るキュラに私は腹が立った。

「でも」

「金がいるんだろ？」

その言葉に黙った私にさらにキュラはさらに言葉を続けた。

何故そんなことをこの男は知っているのか。

そして彼はポコポコーラの最後の一口を飲み干す。

「それに、命を救ってくれたからな」

「それは、一時的とは言っても仲間だった訳だし……」
キュラがわざわざそう言うのは、ハンターの間での悪い風潮があるからだ。

それは、報酬目当てでわざと見殺しにするハンターがいること。
本来、二人で依頼を完遂した場合、報酬は半分ずつになる。

しかし、片方がいなくなれば、一人で完遂したと見なされ、報酬を独り占め出来るのが現行のギルドの法律だ。

そのため、見殺しにするハンターも現れたので、ギルドに法律の改変を求める声が挙がっている。

そして今回は、素性を知らない私に助けられたので礼として報酬を多く渡したいと言うことのようにだ。

「でも、命を救ってくれたことに変わりはない。頼むから受け取ってくれないか？」

ぐいつと麻袋を近づけるキュラの目は不転を表していた。

しかし、私はそれを受け取った後、給仕のギルド嬢に2、3料理と飲み物を注文して代金を渡した。

余談だが、ギルドでは給仕に注文すると同時に先に会計を済ませるのが決まりだ。

酔っ払い過ぎて会計が出来なくなることもそうだが、いつでも騒がしいこの集会所内の喧騒に紛れて、食い逃げする輩を警戒していることだそうだ。

すぐに運ばれてきた食べ物と飲み物を見てキュラが気付いたようだ。

「俺は食わんぞ」

「頼み過ぎちゃったんだからしょうがないじゃない。さ、飲んで食べろ？」

「いや、遠慮しておくよ」

「残したら片付けるの大変じゃない」

私がそう悪戯っぽく言うと、キュラは苦笑いしながら飲み物、ハコビールを手を取った。

「じゃ、乾杯！」

「ちよーっつと待ったあ！」

周りで宴会をするハンター達の喧騒程ではないが、十分な大声が響いた。

樽型のジョッキを持つ手を止めて、声の方に顔を向けると、キュラの妹がいた。

7 兄妹喧嘩にて(前書き)

次ぐらいから文字数を増やしていくつもりです。
感想とかを是非ともお願いします。

7 兄妹喧嘩にて

「ど、どうしたミューラ？」

やや狼狽を隠しきれないキュラの言葉に青筋をこめかみに浮かべた少女 ミューラ。

「何やってんの？そのテーブルのモノは？その手に持ってるのは何？」

「いや、ちよつとご飯の前に軽食を摂ろうかと……」

語尾の言葉は、最早近くにいる私しか聞こえないような声だった。その態度で、しまったと言う心の声がありありと聞こえる。

「ふーん。妹に、すぐ帰るから旨い飯を用意して待ってるって言ったのはどこのどいつかしらね」

あからさまに棘のある言い方をしたミューラとは対照的に頭を抱えたような態勢になるキュラ。

ミューラの言い分からいけば、キュラが一方的に悪い。もしかなくても、私やつちやつた？

ということは私のせいにされてもしょうがないなと諦め半分ですべていると、キュラの口からは意外な反論が出てきた。

「……お前が言いはじめたことだろ？」

「へ？」

怒りのオーラを纏っていたのが一転、目を点にするミューラ、そしてついでに私。

「お前が作ってやるから早く帰ってこいって言ったんだろ？誤解されるような言動は止めてくれ」

呆れ半分と言った感じにため息をつくキュラ。

「な、なななな何のことかしらね？」

いきなり立場が入れ替わった兄妹についていけない私に、兄が説明をしてくれる。

「ミューラは素直じゃないからなあ。いっつも」

しかし後ろの言葉は続かなかった。

否、続けられなかった。

「うおおらあああ！！」

顔を紅潮させたミューラが私とキュラが陣取っていたテーブルにあったもう一つの椅子を、彼に思いっきり叩きつけた。

「それは恥ずかしいから言わない約束だって言ってるのに、このバカ兄貴！バカ兄貴！！」

完全に自分で地雷を踏んでいるのにも気付かずに、椅子でキュラをフルボッコにするミューラ。

この騒ぎ（兄妹喧嘩）は周りのハンター達も気付いたようで、こちらに好奇の視線を注いでいる。

それは、決して邪魔だと言った類のモノではなく、むしろ楽しんでいるように感じられる。

「ミュ、ミューラちゃん、ちょっとやり過ぎよ」

呆気にとられていた私に代わって、一人の給仕が止めに入った。

「ちよっ、邪魔しないでっ！」

羽交い締めにされてミューラがもがくも、給仕の力が勝っているのか、抜け出すことができない。

「もうキュラさんも動けないし、椅子が壊れちゃう！」

給仕が叫ぶと、ミューラは抵抗を止め、しぶしぶ変形した椅子を元の位置に戻した。

それを機にハンター達はまた自分達の宴会を再開した。

良く言えば、基本的に切り替えの早い連中が多い。

しかし悪く言えば利己主義とも言える。

彼らの喧騒がまた戻ったところで、私はぐったりと動かないキュラの側に駆け寄る。

息もしているし、意識も失ってはいないようで安心した。

「私が普段から鍛えてやってるから心配ないわよ」

全く悪びれずに答えるミューラに私は絶句。

毎日のようにこんな暴力が発生している兄妹がいるなんて見たことがない。

しかも仲が全く悪いわけでもなさそうなのに。

これに似たような、といっても遥かに可愛らしいことをする子なら知っているが。

「いくらなんでもやり過ぎ」

「全く、レイノが止めに入らなかつたら椅子を弁償させられるところだったじゃないか」

呑気な声色の主は、さつきまで動かなかつたキュラだった。

頭から出血しているのは気のせいではない。

「え、キュラ？何でもう起きてるの？ていうか頭から出血してるっ」

「鍛えられてるしね、大丈夫だよ」

私の問いに彼はケロリと言つてのけた。

その間も頭からの出血は止まらない。

それでもこの平静を何事も無いかのように保っているキュラ。

鍛えられたからと言つてこんな現実離れたことが出来る訳ない

のでは？

「ま、要するに慣れだよ」

…… 本人がそう言うので、これ以上は何も言わないでおこう。

「レイノ、ありがとう」

程なくして戻ってきた仲裁者の給仕がタオルを持って現れた。

さつきはよく顔が見えなかつたのだが、今見てみると、どこかで会った覚えがないこともない。

つい最近のことだった気がするのだが……。

「あ、アクラル。紹介しよう、ミューラの同居人のレイノだ」

キュラに紹介された給仕と、ここで初めて目が合う。

そして

「あーっ！」

「へっ？」

鮮烈に蘇る、あの肉の香り。

そしてそれを運んできてくれたあのか弱そうな瞳。間違いない初対面ではなかった。

「あ……」

どうやら向こうも気付いたようだ。

あの初日に会った子だった。

話を聞けば、初日に私に料理を運んでくれたのはレイノちゃん。その料理を作ったのはミューラ。

そして、それを提案したのは今頭に包帯を巻いたキュラだった。

「全員一枚噛んでたのね。ありがと」

私が礼を述べると、一名を除いてははにかんだように笑った。

その一名とは言わなくとも察しはつくであるうが、ミューラだ。

ミューラは顔を背けたまま無言だった。

きっとはにかみを抑えるので必死に違いない。

「ところで、レイノって『ハンター寄宿舍』に住んでるの？」

すると、レイノではなくキュラが答えた。

「そうさ。それも、ミューラと相部屋なんだ」

レイノも肯定を表すように頷いた。

「……もしかしなくても、レイノが『ハンター寄宿舍』に住んでることが変だって思っただけかい？」

「あれ、ばれた？」

私の心の中の素朴な疑問をキュラが見破った。

「ま、それには事情があつてね。それはおいおい話すよ」

キュラがそう言うので今は詮索しないことにした。

「……感動の再会も終わったことだし、そろそろ帰るわよ」

いつの間にかいつものちよつと不機嫌な表に戻ったミューラに言われて、キュラも渋々席を立った。

「あんたは？」

初め、それは誰に投げ掛けられた言葉なのか分からずに反応できずにいると、目の前に突如としてミューラの顔が現れた。

「うひっ!?!」

「……何変な声出してんのよ。あんたも帰るの?」

質問の内容は至って普通なのに、ジト目で言われれば嫌々聞いているようにしか見えない。

「レイノちゃんは?」

「あの子はまだ仕事。帰るんなら早く支度してよね」

そう言われて、私は慌てて二つの麻袋を持って先を歩くミューラとキュラを追った。

8 過去にて

いつもの集会所の喧騒から一步抜け出れば、静寂に満ちた大通りになっている。

多少は明かりの点いた建物を在るには在るが、十分とは言い難い明るさ。

あとは雨戸で閉め切られた窓ばかり。

これで一人この大通りを歩けるかと言うと、自信はない。

初日に見た浮浪者がもし大通りに出てきていたりしたら、たまったものではない。

「……何か、気味が悪いね」

「もう慣れたわ」

そう言うミューラだが、実はすっかりキュラの服の袖を握っている。

キュラもそれに関しては何も言わず、表情も変えていない。

「星空は綺麗なのね」

半ばミューラの言葉を無視したように呟いたが、特に気にした様子もなかった。

「寄宿舎の天窓からの星空もいいよ。寒い日何かに暖かいお茶でも飲みながらの天体観測」

「私は暖かい布団でさっさと寝るけどね」

私の返答に何故かしゅんとするキュラ。

もしか、誘われていたのだろうか。

「バカ兄貴と違ってそんなことしたら風邪引くっつもの。バカ」

さらに妹に辛辣な罵声を浴びせられて、キュラはますますしゅんとなった。

袖を掴みながらそう言うミューラは、キュラの説明通りなら妬い

ているのかもしれない。

気付いてやりなよキュラ。

「と、とにかくだ。星空は綺麗だ、うん」

「……何言ってるんだか。バカ」

ミューラが発言する度に語尾にバカを添えるのは仕様だろうか。

「この街もこの星空ぐらい綺麗ならいいのになー」

すると、キュラは目を軽く伏せた。

「最近ただの浮浪者に紛れて、人さらいが暗躍しているらしいんだ」
人さらい。

奴隷商人の別称だ。

「前も、街の普通の女の子が消えた」

キュラの言葉にミューラの顔に恐怖の色が軽く見え隠れしている。

「……あのさ、間違ってたら申し訳ないんだけど、もしかしてレイ
ノって……」

私がそう切り出すと、ミューラが重々しく口を開いた。

「うん、元奴隷よ……」

それから寄宿舎へと無事に帰り着き、ミューラの部屋に集まった。

「今お茶入れるから」

そう言われて、テーブルの椅子に座って待っていると、キュラも
現れ、一緒に待つ。

「本当に、話してくれていいの？」

「ああ、もうアクリルとは戦友だし、命の恩人だしね」

程なくして、盆にお茶を注いだカップを持ったミューラが奥から
現れた。

「さ、どうぞ」

「あ、ありがとう」

「いただきます」

礼を述べると照れ隠しに黙るのはもはや定番のようだ。

そんな妹の様子を気にも留めずにキュラは茶を一口飲んだ。そういえばさつきからものすごい水分量を摂取している気がするのだが、この際気にしないことにしよう。

「さて、レイノのことなんだけど……」

キュラが、語り始めた。

レイノちゃんとの、悲しい馴れ初めを。

時は遡ること二年前。

キュラ 僕はその時はハンターではなく、兵士をしていた。

奴隷商人が街に入ったという報告を受けて、警戒の強化を命じられた。

僕も巡回隊だったから、朝は早くから夜は遅くまで仕事をしていて、ミューラには迷惑をかけた。

日を重ねる毎に増える失踪者。

しかし、警戒の強化をしていたにも拘わらず、手がかりは皆無。

そんな、芳しくない状況が続いた。

そんな最中、ある報告が届いた。

「キュラ……お前の妹がさらわれた……」

同僚からの言葉にショックを隠せなかった僕はなりふり構わずに家に帰った。

すると、一枚の紙があり、見てみると何やら文面があった。

「お前の妹は三日後のオークションで出品される。返して欲しくばオークションで買って取り戻せ。尚、このことが表沙汰になれば、妹を酷い目に遭わせる。」

一度だけ、奴隷商人達によるオークション会場を見たことがある。大体男は一人当たり30000zに対し、女は大体50000zと高額。

それに女は顔や体によって値段が上がる場合が多く、妹は顔は良い方。

ならばそれ以上の金が必要になるだろう。

そんな大金を短期間でただの一端の兵士の僕が稼げる訳がない。絶望していたとき、ある一団を発見した。

それがハンターだった。

僕は早速ギルドへ行つて、ハンターとして登録。

即日で大金を稼ぐ依頼を探すも、全く見つからず、僕の受けられる依頼は安いものばかり。

とにかく、一番高い報酬のアオアシラの討伐に出かけた。

しかし、いきなりそんなモンスターに挑んだのはバカだったという事を身を以って思い知らされた。

気合いで剣を突き立てて突進するも、敢え無く弾き返され、反撃される。

良くて、ジリ貧、悪く言えば完全な劣勢だった。

ただのショートソードでは全くダメージを与えられず、兵士に支給される安物の鎧では大した防御力にはならない。

遂に腕の一撃で吹き飛ばされ、そのまま崖から転落、意識を失ってしまった。

それからどのぐらい経ったのか、目が覚めた。

そこは薄暗い、洞窟の中だと分かったのはそれから少し経ってから。

誰かが助けてくれたことは分かっている。

が、近くに人の気配を感じないので、とりあえず側においてあった携帯食料　初めて口にするが、酷くマズイ　をかじり、誰もいないが礼を述べて出口と思われる光が射す方へと向かった。

出口から出た瞬間、久しぶりに感じられる太陽光に眩しさを覚え、つい目を細めて顔をしかめた。

その時、声をかけられた。

「や、兵士君。もう起きて大丈夫なのか？」

赤色の鎧に身を包んだ女性だった。

背中にはこれまた赤色の大剣を背負っていて、自分のショートソ

ードがまるで玩具の様に思えた。

「ああ、大丈夫だ。アオアシラを討伐してくるよ」

胸を叩いてそう答えたが、女性は残念そうな顔をした。

「すまないが、それはアタシが討伐してしまったよ」

「え？」

依頼を受注したのは僕だったはずなのに、何故。

「実は、昨日の夕方にアオアシラの討伐に向かったハンターが殺されたという報告があつて、代わりに私が引き継いだんだ」

殺された、だつて？

どこからそんな報告が……狩りには何日もかけることなんか普通なのに。

「これに、見覚えはないか？」

そう言つて女性が取り出したのは、深紅に染まった僕の頭装備。

「僕の、です」

「これを見つけた別の依頼を遂行中だったハンターが、殺されたと判断したようだ」

そう言われて見た頭装備は形が変わり、血で染まっている。

これなら、死んだと判断されても文句は言えない。

「……」

「……兵士崩れがハンターになることはよくあること。だが、君からはそんな雰囲気を全く感じられない。何か、訳があるんだろう？良かったら話してはくれないか？」

少しばかり躊躇つたが、このまま自分一人ではどうすることもできないことを思い知つたので、女性に事情を話した。

「……なるほど」

女性 アレスは考えるように言った。

「もう明日の夜にはオークションが始まるつて言つのに……このままでは、妹が貴族の慰み者にされてしまう……」

想像するだけでも悪寒が走った。

普段口の悪い妹だが、それ以上の優しさを持っていることを知っ

ている。

そして、寂しがりでか弱いことも。

「なら、力を貸そうじゃないか。なに、遠慮はいらないさ」

頼もしくウインクもしてくれたアレス。

しかし

「ハンターは、人に武器を向けちゃいけないんじゃない……」

するとアレスは小さく笑い、そしてまた頼もしく顔つきになった。

「誰も皆殺しにしようなんて言っていない。もっと平和なことだよ」

そこでアレスは一拍置いた。

「私の財産を貸してやる」

僕は自分の耳を疑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9659p/>

モンスターハンター<約束の士>

2011年8月12日03時18分発行